平成 18 年度　第２回地域会議議事概要

3 月 20 日、青森市にあります「日本原燃サイクル情報センター」において、地域会議を開催しました。

この会議は、私共日本原燃㈱が地域の皆さまから信頼していただける企業となることを目指し、当社経営層が直接地域の皆さまのご意見やご指摘などをお伺いして、事業活動に活かしていくことを目的に開催させていただくものです。

（委員）

吉田　豊　様	弘前大学名誉教授（前学長）
芦野　英子　様	エッセイスト
菊池　としえ　様	六ヶ所村保健協力員協議会会長
北村　真夕美　様	㈱青森経営研究所代表取締役社長
平出　道雄　様	青森中央学院大学地域マネジメント研究所長
松尾　拓爾　様	六ヶ所村商工会長
村井　正昌　様	原子燃料サイクル施設対策協議会会長
佐々木　一仁　様	㈱ササキコーポレーション専務取締役　（ご欠席）

【会議風景写真】

● 議題

（１） アクティブ試験第３ステップ以降の広報課題

（２） 次世代層への理解促進

● 議事

〇当社社長の挨拶

８月半ばから着手した、第２ステップも１２月６日に終了し、この１月２９日から、５つあるアクティブ試験の段階のうち、３つめとなる第３ステップに入らせていただいております。

これまでの第１・第２ステップでは、個々の設備の性能を確認するとともに、施設の基本的な安全性について確認いたしました。それを踏まえ、第３ステップ以降では、各建屋間の連携を図り、工場全体の運営という視点から連続的に試験を進めていくものであります。

そうした中で、過日、ウラン・プルトニウム混合脱硝工程において、既に脱硝作業が完了し、脱硝体が入っている脱硝皿に、再びウラン・プルトニウム混合溶液を供給し、脱硝装置にかけるといった不適合が発生し、本日、国に、その原因と対策および再発防止策についてご提出申し上げたところでございます。

人為的な要素、手順の要素、マニュアルの要素、ロジックの要素、設備の要素等、様々な観点から対策を講じ国に報告いたした次第です。

本件は、作業員の健康にも、また環境に対しても、一切影響がないものではありますが、起こってはならないことであり、大きな教訓として、先ほどのいくつかの要素について、我々の事業全体の中で照らし合わせ、水平展開をはかっていくものであります。

地域会議の委員の皆様にご指導いただいておりますのは、こういったことを経ながら、いかに県民の皆様から安全に対する理解を得て、そして安心につなげていくかということであります。

本日の地域会議では、今後のアクティブ試験の推進にあたって、県民の皆様にご理解をいただくための「当社広報活動の進め方」と、「エネルギーとりわけ原子力に対する次世代層への理解活動」を主要テーマに、委員の皆様方からご指導を頂きたいと考えております。

それともう一点、3 月 22 日に、9 月に開催したメンテナンス見本市に続く試みとして、再処理工場の「予備品倉庫見学会」を開催いたします。これは、再処理工場で使用する部品について、青森県内の企業、メーカーの皆様に作っていただこうというものですが、これは地域振興を図るとともに、もうひとつ、我々の事業に参画いただくことで、当社事業に対するご理解をより一層深めていただこうというというねらいもございます。

それでは、「当社広報活動の進め方」と、「エネルギーとりわけ原子力に対する次世代層への理解活動」について、委員の皆様方から、忌憚のないご意見・ご提言を賜りますよう、お願い申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

●各委員からのご意見等

〇広報の進め方（事象の公表等について）

- 「ウラン脱硝建屋における作業員の負傷」という表現は、活字から入ってくる先入観として、さも、ウラン脱硝作業によって作業員の方が怪我をされたかのように受け止められがち。むしろ「梯子から足を踏み外した怪我(脱硝建屋)」といった表現の方が安心に繋がるので良いと思う。
- 作業における些細な怪我等について、公表しなければならないのか。
- 情報公開については、やはり細かいことまで丁寧にA、B、C情報としてやっていくことが、新聞社の方にも信頼してもらえるのではないか。積極的に情報公開をやっていく姿勢がなければ、原子力発電所臨界事故隠しのようなことに陥ってしまうかもしれない。

○広報の進め方（その他）

- 青森県民の多くは、‘テロ対策’はどうなっているのだろうかという意識が強いと感じる。日本原燃として、「こういう対策を講じている」との広報を実施していく必要性があるのではないか。
- 青森県における原子力産業の経済効果、ウェイトを、何年後にはこうなりますよというビジョンをもって示していくべき。
- 青森県の農業者に広報していくうえでは、農業者のリーダー格で、県が認定している‘農業経営士’の方たち、また、‘ビッグウーマン’の方たちに広報アプローチしていかれるのも良いのでは。
- エネルギーと地域の問題とのかかわりについても、お話しの折に取り上げてもらえればいいのかなと思います。（原油の高騰に対しトウモロコシを使ってエタノールの生産を大規模に開始したため、畜産・酪農に必要な飼料価格が 50%の高騰となった。）

○次世代層への理解促進

- 教育委員の果たす役割は大きく、また、近年、現在の教育のあり方に対する批判の中で、「このままではいけない」とかなり問題意識をもって取り組まれている委員の方も多くおられる。こういった方たちに、エネルギー教育の必要性を理解してもらうべきではないか。
- 子ども達には「私の住んでいるところはこういう文化で、こういう施設があります」と自信をもって答えられるようになってもらいたい。単に、電気エネルギーのしくみ等について解説する教材でなく、「六ヶ所、大間、東通の施設によって、世界的に貢献しているんだよ」といった視点の教材が必用。
- エネルギー教育は、学校の先生が嫌々教えるよりも、課外授業等で原燃の若い職員さん等に直接教えてもらうほうが効果的ではないか。
- 霧箱等色々な実験は、子供たちの興味を引く。原子力はともすると敬遠されがちだが、若い人たちが興味をもつやり方で進めていけば、発展していくものだ

と思う。

- 教育は、状況作りが大切。教えるほうも教わるほうもインタレストが肝要。実験イベントのようなものを積極的に進めるべき。
- 青森情報センターに、東北電力仙台グリーンプラザのような施設ができ、展示施設以外の部分で実験コーナー等があれば良いと思う。
- 最近の子どもは、活字は読まないが、ＤＶＤのハイスクールミュージカルのようなものは熱心に見る。ニューエナジーミュージカルのようなものはいかがか
- 資源に乏しい、日本が進めてきた原子力を中心としたエネルギーの歩み、また、これらに関わった人たちに関係する話、こういったことについて楽しんで学べるアニメを、学校や、女性の勉強会等で使いやすいように作って頂きたい
- ＮＨＫの教育テレビで、それを見なければ友達から仲間はずれにされかねないくらい人気の高い参加型番組があるらしい。可能であれば、そういった番組でエネルギー教育を取り扱ってもらうのも一つの方策。

○その他

- 再処理工場で最近小さな怪我が続いているという話があったが、気を引締めるだけでは対策にはならない。何か悩みがあるのか、職場で気にかかることがあるのか、家庭的な問題があるのか、色々なことが複合的に絡んで、そういった事象が発生しているものとして分析しなければならない。
- 村の女性達の集まりに、原燃の女性職員が来て、直接的な広報というよりは、自分達は工場でこのような仕事をしていますといった話しがなされた。肌感覚でのこういった交流が安心に繋がると感じた。

以上